

情報検索のスキルをどう高めるか

— 「データアクセス法」の授業実践から得られたこと —

中村広幸・関西学院大学
nakamura@iceice.com

山田晴通・東京経済大学
yamada@tku.ac.jp

1. はじめに

大学教育の場におけるパソコンの普及を背景に、多くの大学では、学生がパソコンの基礎的な利用方法を習得するための科目を1年次に設けている。「コンピュータリテラシー」「情報リテラシー」「情報処理入門」などと科目名は多様であるが、その内容は次のようなものがほとんどである。すなわち、パソコン（主にWindows）の基礎操作、ワープロ、表計算、プレゼンテーションの各ソフト（主にマイクロソフトのワード、同エクセル、同パワーポイント）の基礎的な操作方法、ウェブブラウジングと電子メールの利用方法である。

もちろん、レポートや論文の作成、調査データの集計や分析、ゼミや学会での発表などにおいて、パソコンとこれらのソフトの利用がごく普通のこととなった現在、学生がなるべく早期にこれらのソフトを活用できるようにすることは必要なことである。

しかし、インターネットを利用した情報検索の機会が増し、検索サイトをもとに情報を入手したり、各種データベースを利用して情報を検索していくことが容易に、かつ、気軽になる一方で、情報内容を十分に吟味することなく、あるいは、出典を曖昧にしたまま、レポートに記述したり、ルールを無視して引用するなど、いわゆる「コピペ（コピー&ペースト）」の乱用や濫用をしばしば目にするようになった。

パソコンとそのソフトを利用するとしなないと関わらず、入手した情報を吟味しながら掘り下げて検索したり、一定のルールのもとで引用したり、出典や情報源を明記してレポートや論文を作成していくことは大学教育（願わくばそれ以前の教育）で身につけるべきことであるが、パソコンとインターネットの利便性のゆえに、これらが安直に行われたり、ほとんど意識されずに行われるような状況が生まれている。

「情報リテラシー」は「コンピュータリテラシー」に

とどまらず、「情報および情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質」（臨教審, 1986）であると考えられているが、たとえば、情報検索において、どこまで「主体的に選択し、判断し、活用」できる能力を学生が身に付けられるようになっているのだろうか。こうした問題意識から、本稿では、東京経済大学コミュニケーション学部において筆者らが取り組んできた科目「データアクセス法」の試みを述べる。

2. データアクセス法の概要

データアクセス法は、2年生以上を対象にした専門応用科目（選択科目）であり、1996年から半期ごとに開講されている。当初から履修者全員が一人一台のパソコンを利用しながら受講できるようにしたことから、PC教室の定員約30名を目安に1授業を行っている。2004年度は、筆者を含む3名の講師により、合計12コマの授業が行われている。

授業内容は、全体としては上述した情報リテラシーの向上を念頭に置き、特に電子的な情報検索の方法を学生が習得することを主眼としていると言えるが、講師のバックグラウンドの違いなどから、講師ごとに内容は異なっている。なお、山田は1996年度から2000年度までと2002年度、中村は2001年度及び2003年度以降を担当している。

3. シラバスと授業内容

筆者らはデータアクセス法を「インターネットなどから文献情報を引き出す方法」として位置づけ、次を授業内容としている。

インターネットやパソコンの普及が急速に進み、今やこれらはデータや情報を収集するうえで最も身近な道具となったばかりでなく、こうした道具を効

果的かつ効率的に利用することは、研究や仕事を進めるうえで必要不可欠な要素となっている。

本講義では、「オンライン／オフライン」あるいは「電子的／非電子的」を問わず、一般的にデータや情報を収集するうえで表面化する諸問題を論じたうえで、インターネットやCD-ROMなどを用いた文献情報データベースや各種のデータベースへのアクセスを中心に実習を行う。

具体的には、大学図書館の館内システム、大学等の図書館を結ぶネットワークについて、その仕組みを理解し、実際の利用方法を実習する。また、インターネットおよびCD-ROMを活用した情報・データ検索、情報入手法についても講義と実習を通じて理解を深める。最終的には卒業論文につながる文献表を作成することを視野に入れる。

具体的には、次の内容を織り込み、それぞれ講義・演習・解説の形で展開した。

- ・情報検索の基本
- ・インターネットを利用した情報／データ検索
- ・図書館を利用した文献検索
- ・CD-ROMやデータベースを利用した文献／データ探索
- ・書誌情報の扱いやデータの扱い
- ・メーリングリストなどを活用した情報入手

なお、メディアやマスコミなどに関心の高い学生が多いことから、学生の興味・関心を持続させるために、演習課題には映画に関するテーマを盛り込むなどの工夫をした。

4. インターネットを利用した検索

紙幅の都合から全体に触れることはできないので、ここでは、講義終了後の学生アンケートで学生の評価が集中したインターネットを利用した検索について述べる。

受講学生が2年生以上（主に3年生）であることから、ほとんどの学生が、たとえば「Yahoo!」などのインターネット検索サイトの利用を経験している。しかし、何のガイダンスもなしに検索の課題を与えると、ほとんどの学生は次の傾向を示す。

- (1) ひとつの検索サイトでしか検索しない
- (2) 検索サイトが示す上位のものしかアクセスしない

そこで、授業では次の点について実例をもとに示した。

- (1) 検索サイトは引き方にそれぞれ特徴があること
- (2) 結果の示し方にサイトによるバイアスがあること
- (3) キーワードの与え方でサイトにより結果が大きく異なること

具体的には、たとえば、同じキーワードを複数の検索サイトに与え、検索結果の件数や表示される順番を比較させた。その後、演習課題として、10問程度の検索課題を与え、検索結果とその結果を得るために調べたウェブ（ページ）のURLを答えさせた。

演習前は、ほとんどの学生が検索サイトが提示する順番が早いもの、すなわち、リストの上位に出現するサイトを検索するが、演習後は、その情報に関する公式サイトがあればそれを検索するようになる。

例を示そう。国分寺市の統計データを検索する場合、国勢調査であれば、まず総務省統計局のサイトから情報を得ようとし、そこから必要とする情報を得られない場合に、国分寺市のサイトから情報を得ようになる。また、公式サイトがない場合は、複数のサイトからより信頼性の高いと考えられるサイトを複数選び、情報を得ようになる。

同様の演習課題を間を置いて繰り返すことで、学生への定着をはかった。その結果、多くの学生から「これまで安直に検索サイトを利用していましたがこれからは複数のサイトを利用して情報を吟味していきたい」という感想がアンケートに寄せられている。

5. おわりに

情報リテラシーは大学の講義や演習を通して幅広く身に付けるものであり、パソコン及びそのソフトの扱い方（コンピュータリテラシー）以外には特別な授業を必要とはしないとの考え方もあろう。しかし、インターネットの普及により、情報の検索が容易になる一方で、安易に検索サイトに頼ったり、何らの疑問を持たずに不確かな検索結果を利用している場面にしばしば遭遇する。

データアクセス法で試みた、インターネットなどを利用した情報検索のスキルの習得、さらには、広く電子的／非電子的を問わず情報を扱うスキルを習得させることの必要性はますます高まっているのではないかと考える。